

論民団の要約を終えて

多摩大学 経営情報学部 事業構想学科

21911009 阿部翔太

21911009sa@tama.ac.jp

背景

我々、高橋恭寛ゼミでは経営思想について学ぶため海保青陵の著書を各々読み要約、軽易な考察を行った。

「論民談」は、海保青陵が著した。

・海保青陵 1755～1817

経世家。宮津、尾張藩の儒官。藩営専売制の採用など重商主義を説き、他藩による方策を主張。

本書は貸した金を返せなくなった大名から、格式を与えられた 3 人の商人の振舞について書かれている。武士のごとく盛大に振舞いようになった町人、慎ましく生きる町人、慎ましく生きるかつお金を増やすことにいそしむ町人である。本書によれば町人は身分相応、贅沢をせず商いに努めるべきとしている。本書は商人を海とし、高い身分を山としている。水は山から海へ流れる。つまり水を金銭と置き換えお金の流れを示しているため商人というのは海同様お金が流れてくる立場とした。またお金の流れの話でいえば本書によると藩の格式といった制度を藩が真似るのは愚行ともした。幕府が格式を与えるのはお金の回りを良くし国内全体の経済を回すためであるが、藩は一つの地域に過ぎず、藩の経済は藩で回しているためお金が出ていくと戻ってこないため藩が貧しくなっていくからである。

考察

私が思うにこの話は身分制のあった江戸時代、商農の民に身分相応に儉約に生きることを諭していたのではないかと考える。

参考文献

(1) 正解の歴史マップ

<https://sekainorekisi.com/glossary/%E6%B5%B7%E4%BF%9D%E9%9D%92%E9%99%B5/>

(2) 「安藤昌益・富永仲基・三浦梅園・石田梅岩・二宮尊徳・海保青陵」

(「日本の思想」第18巻) 筑摩書房 1971年

